第二章　玉鬘邸の物語　梅と桜の季節の物語

［第一段　正月、夕霧、玉鬘邸に年賀に参上］

睦月の*朔日ころ（むつきのついたちころ、一月上旬の好日に）、尚侍の君の*御兄弟の大納言（玉鬘殿の弟血筋の藤大納言）、*「高砂」謡ひしよ（この人は昔に光君の前で高砂を謡った童子だった人だが）、藤中納言（それに藤中納言）、故大殿の太郎（この人は故右家殿の長男で）、真木柱の一つ腹など参りたまへり（真木柱と同腹の弟という人たちなどが玉鬘邸に年賀に参上なさいました）。　*「ついたち」は＜月の初日＞でもあり＜月の上旬＞でもあるらしい。一月一日は家内での年賀、もしくは宮中での年賀があるのではないか。是は元日の話ではないだろう。「ころ」は＜およその期間＞を言う場合と＜適宜な日時＞を言う場合があって、皆が参集する場合は好日を選んで決めた日程になるかと思う。　*「御兄弟」は「おおんはらから」と読みがある。というより、写本の「はらから」という平仮名に「兄弟」の漢字を当てたのかも知れない。「はらから」は本来は＜同腹兄弟＞を言う筈だが、「尚侍の君」は夕顔腹で同腹兄弟はいない。だから、此処での「はらから」は＜異腹兄弟＞または＜兄弟関係にある人＞を意味していて、その文意を汲んで「兄弟」の漢字を当てる校訂を施したもの、なのだろう。因みに、侍従君を 16 歳と見た時の他の登場人物の年齢は、玉鬘 49 歳、藤大納言 48 歳、藤中納言 36 歳、真木柱 39 歳、源殿 42 歳、くらい。　*「高砂謡ひしよ」の言い回しについては、注に＜『弄花抄』は「注也」。『評釈』は「大納言についての説明。大納言はすでに「紅梅」の巻で活躍しているから、説明がなくても一応は判るが、語り手は一言つけ加えた。その理由の一つはこの巻の語り手が、それまでと違ってかんの君方の古女房だからである。他の一つはこういうさりげない一言で、物語の世界に深みをあたえ、時間的遠近法の効果をはかった」と注す。＞とある。語り手が右家の女房だから、というのは私にはコジツケに聞こえる。そして、そのコジツケが当巻冒頭から意図されているような気もする。ともあれ、高砂の逸話は光君や左家にとっての懐かしい話題であって、増して当時は右家は権勢家として左家筋を排除していたのであり、右家にとっては些末な事と片付けるべき事柄に思えてならない。しかし、高砂謡いは読者としては印象深い場面で、こういう説明はとても分かり易い。が、この巻だけは他の後日談とは別に賢木巻と同一の作者が書いたものか、それとも読者だった別人物が書き加えたものか、妙に分かり易い語り口に変な違和感を感じる、という複雑な落ち着かなさが気になるのは私だけではないだろう。

右の大臣も（源右大臣も）、御子ども六人*ながらひき連れておはしたり（御子息たち六人揃って引き連れて御見えになりました）。御容貌よりはじめて（源殿はその姿かたちの素晴らしさから始まって）、飽かぬことなく見ゆる人の御ありさまおぼえなり（何不足無く揃って見える権勢家の御威容でした）。　*「ながら」は＜という形で→揃って→全員で＞みたいな言い方らしい。

君たちも（子息たちも）、さまざまいときよげにて（それぞれとてもきちんとしていて）、年のほどよりは（年の割には）、官位過ぎつつ（つかさくらゐすぎつつ、出世も早く）、何ごと思ふらむと見えたるべし（何の問題も無さそうです）。世とともに（三条殿の隆盛のままに）、蔵人の君は（正妻腹の蔵人君は）、かしづかれたるさま異なれど（大事にされることこの上ないが）、うちしめりて思ふことあり顔なり（姫との仲が進まないことに、物思いがちに沈み顔でした）。

大臣は、御几帳隔てて、昔に変らず御物語聞こえたまふ（源大臣は玉鬘殿と御几帳越しに昔と変わらずにお話し申しなさいます）。

「そのこととなくて(多用にて)、しばしばもえうけたまはらず(御無沙汰仕っております)。年の数添ふままに(歳を取りますと)、内裏に参るより他のありき(公務以外の外出が)、うひうひしうなりにてはべれば(億劫になりまして)、いにしへの御物語も(懐かしい昔話も)、聞こえまほしき折々多く過ぐしはべるをなむ(申し上げたい折々を多く見過ごしてまいりました)。

若き男どもは(息子たちは)、さるべきことには召しつかはせたまへ(何かの御用に遠慮なくお呼び付け下さい)。かならずその心ざし御覧ぜられよと(姉上のお役に立つようにと)、いましめはべり(言い聞かせてございます)」など聞こえたまふ(などと申しなさいます)。

「今は、かく、世に経る(今はこのように世に表立つ公家の)数にもあらぬやうになりゆくありさまを(物の数にもならないようになってしまった立場なのを)、思し数まふるになむ(お忘れなくお訪ねくださって)、過ぎにし*御ことも(昔の六条院の御恩も)、いとど忘れがたく思うたまへられける(いっそう強く思い出されます)」　*「御こと」の「御」は六条院への敬意なのだろう。

と申したまひけるついでに(とお答え申しなさるのに続けて)、*院よりのたまはすること(冷泉院が長女の参院をお申し入れ下さっている事を)、ほのめかし聞こえたまふ(少し申しあげて相談なさいます)。　*「院」は注に＜冷泉院。＞とある。単に「院」と言えば、現在存命中の冷泉院を指す、ということだろうか。

「はかばかしう後見なき人の交じらひは(有力な後見人がいない者の御所仕えは)、なかなか見苦しきをと(肩身が狭いかと)、思ひたまへなむわづらふ(考えあぐねております)」

と申したまへば(と玉鬘殿が申しなさると)、

「内裏に仰せらるることあるやうに承りしを(帝にも入内促しの仰せがあるように聞いておりますが)、いづ方に思ほし定むべきことにか(どちらにお決めなさるべきでしょうか)。院は、げに(冷泉院は確かに)、御位を去らせたまへるにこそ(退位なさったので)、盛り過ぎたる心地すれど(御権勢の盛りは過ぎたようでも)、世にありがたき御ありさまは(滅多に居ない敬うべきそのお姿は)、古りがたくのみおはしますめるを(少しも衰えていらっしゃらないので)、よろしう生ひ出づる女子はべらましかばと(相応しく成長した娘が居たら参院させたいと)、思ひたまへよりながら(考えては居りますが)、恥づかしげなる御中に(御立派な院の女御様方のお仲間に)、交じらふべき物のはべらでなむ(入れて頂けるほどの娘が我が家には居りませんので)、口惜しう思ひたまへらるる(残念に思われます)。

そもそも(それにしても)、*女一の宮の女御は(本家筋の弘徽殿女御は)、許しきこえたまふや(姫の参院を許しなさいますか)。さきざきの人(今まで他の近親者は)、さやうの憚りにより(その遠慮から)、とどこほることもはべりかし(中止になったことも有った筈です)」　*「女一の宮の女御」は＜冷泉院の第一内親王の母女御＞という言い方で＜左家姫の弘徽殿女御＞のことらしく、玉鬘から見て同父妹だが、立場としては本家の姉筋に当たる人なのだろう。因みに、冷泉院 45 歳、故左家殿女の弘徽殿女御 46 歳、玉鬘 49 歳、あたり。

と申したまへば(と源殿が申しなさると)、

「女御なむ(その女御から)、つれづれにのどかになりにたる*ありさまも(手持ち無沙汰になったことも有って)、*同じ心に後見て(院と同じ親心で当家の娘を世話をして)、慰めまほしきをなど(気を紛らわせたいみたいな)、かの勧めたまふにつけて(そんなお誘いがあったので)、いかがなどだに思ひたまへよるになむ(どうしたものかなどと考えるようになったのです)」　*「ありさまも」の「も」は強調の係助詞ではありそうだが、「ありさま」を強調する語用は＜ある状態であること＞を注目させる意図があるワケで、或る事に注目させた上で叙述を続けるという構文は、その或る事が下文の理由や条件を示している事に成り、「も」は実質で＜からも＞と同様な働きをしている、かと思う。　*「同じ心」は冷泉院と＜同じような親心＞なのだろう。一章二段に冷泉院の詞として「今は、まいてさだ過ぎ、すさまじきありさまに思ひ捨てたまふとも、うしろやすき親になずらへて、譲りたまへ」とあった。と言って、決して養子縁組の話ではなさそうだ。

と聞こえたまふ(と玉鬘は申しなさいます)。

これかれ(縁者たちは)、ここに集まりたまひて(この玉鬘邸に集りなさってから)、三条の宮に参りたまふ(三条の入道宮に年賀参りをなさいます)。朱雀院の古き心ものしたまふ人びと(朱雀院の恩顧に与った高官たちや)、六条院の方ざまのも(六条院に恩ある者たちも)、かたがたにつけて(それぞれの縁で)、なほかの入道宮をば(やはりこの入道宮の所は)、*えよきず参りたまふなめり(帝の御配慮篤い妹宮なので、とても素通り出来ず参上なさるようです)。　*「得避きず」の「え」は＜不抗性＞を示していて、その強制力は入道宮が今上帝の御加護篤い妹宮だという事情から来るもの、なのだろう。

*この殿の左近中将(玉鬘の子息の故右家殿三男の左近中将)、右中弁(故右家殿四男の右中弁)、侍従の君なども(五男の藤侍従君なども)、やがて大臣の御供に出でたまひぬ(そのまま源右大臣の御供で三条宮邸に出掛けなさいました)。ひき連れたまへる勢ひことなり(源殿の引き連れなさる御一行の御威勢は格別です)。　*「この殿」は＜玉鬘腹＞ではあるだろうが、既に独立したとは言え、先妻王女腹の故右家殿の長男と次男も玉鬘が右家の子息として育てたのであり、同じ王女腹ながら祖父の式部卿宮家に引き取られて養女となった真木柱とは違って、家系上は王女腹の長男と次男も玉鬘の子息の筈だ。従って、左近中将は故右家殿三男と見て置くべきなのだろう。因みにそれぞれの年齢だが、真木柱巻に王女腹の子供たちは年齢が明示されていて、其処から主に玉鬘との年齢差での勘定となる。真木柱巻での設定は今から 26 年前の話で、当時で玉鬘 23 歳、「女一所、十二、三ばかりにて、また次々、男二人なむおはしける」(真木柱巻三章一段)とあった真木柱は 13 歳、「男君たち十なるは殿上したまふ」(同五段)とあって長男 10 歳、「次の君は八つばかりにて」(同)とあって次男は 8 歳。更に同年に「その年の霜月に、いとをかしき稚児をさへ抱き出でたまへれば」(真木柱巻五章二段)とあって玉鬘腹の初産で右家殿の三男に当たる、此処で言う左近中将が生まれているので、三男は 1 歳ということになる。四男以下は他の帖の参照になって少し分かり難いが、若菜上巻五章二段に「尚侍の君はうち続きても御覧ぜられじとのたまひける」とあって四男が三男と年子だったとあるので、1 歳違いらしい。また、若菜下巻三章三段に「右の大殿の御子ども二人、大将の御子、典侍の腹の加へて三人、まだ小さき七つより上のは、皆殿上せさせたまふ」とあって、是は翌年の朱雀院五十賀へ光君が孫を出席させる話題だったので、今からは 17 年前で、故右家殿の三男 9 歳、四男 8 歳、源殿の典侍腹の長男が 7 歳だったことになる。是等をまとめると、今現在で玉鬘 49 歳として、王女腹長男 36 歳、次男 34 歳、玉鬘腹三男 26 歳、四男 25 歳、また源右大臣家の典侍腹長男 24 歳、源殿 42 歳、あたりとなる。右家五男や玉鬘殿の長女や次女、また源蔵人少将の年齢などは未だに不明だ。

［第二段　薫君、玉鬘邸に年賀に参上］

夕つけて（夕方になって）、四位侍従参りたまへり（入道宮腹の四位の侍従が玉鬘邸に参上なさいました）。そこらおとなしき若君達も（大勢の成人した若君たちも）、あまたさまざまに（皆それぞれに）、いづれかは悪ろびたりつる皆めやすかりつる中に（甲乙付け難い美男子揃いの中に）、立ち後れてこの君の立ち出でたまへる（少し遅れてこの侍従君が現れなさると）、いとこよなく目とまる心地して（それもう非常に目立って見えて）、例の（例によって）、ものめでする若き人たちは（元気の良い卵子が疼いて逸る気持ちが抑えられない、口喧しい若女房たちは）、「なほ（やっぱ）、ことなりけり（段違いだわ）」など言ふ（などと口走ります）。

「*この殿の姫君の御かたはらには（うちらの大姫君のお婿さんには）、これをこそさし並べて見め（こういう方を並べて見たい）」と、聞きにくく言ふ（と、はしたない口を利きます）。　*「この殿の姫君」は注に＜以下「さしな並べて見め」まで、女房の詞。玉鬘の大君と薫の結婚を仮想。＞とある。確かに、一章三段に「姫君をば、さらにただのさまにも思しおきてたまはず、中の君をなむ、今すこし世の聞こえ軽々しからぬほどになずらひならば」と、玉鬘が源少将の求婚に対して、長女は入内させるので論外だが、次女なら出世次第では考えても良い、と考えていた場面で、「姫君」を＜長女＞に対して使っていたのが印象的で、此処でも「この殿の姫君」は次女ではなく、長女に限定した語用なのかも知れない。

げに（確かに侍従君は）、*いと若うなまめかしきさまして（とても若く人を引き付ける風情ある様子で）、うちふるまひたまへる匂ひ香など（辺りに振りまきなさる色香など）、世の常ならず（ただならぬものがあります）。　*「いと若う」とあるが、源氏光君の末子の侍従君の薫君は 16 歳と見ていて、他の諸君が 20 歳過ぎであるようなので、確かに一際若そうだ。が、肝心の姫の年齢が明示されていないのは非常に心外だ。それと、源殿の蔵人少将の年齢も分からない。恐らく少将は 10 代で、もしかすると侍従君より若いかも知れない。こういう主要事項が明示されないまま話を進める神経は本当に分からない。つくづく、当時の事情通の宮廷読者相手の物語なんだな。

「姫君と聞こゆれど（いくら深窓の令嬢たる姫君でも）、心おはせむ人は（物心の付いていらっしゃる人なら）、げに人よりはまさるなめりと（本当に他の人とは違うと）、見知りたまふらむかし（この侍従君の素晴らしさはお分かりなさるに違いない）」とぞ*おぼゆる（とさえ思えるほどです）。　*「おぼゆる」は注に＜語り手の感想。＞とある。地の文ということらしい。それでも女房語りなのだから、玉鬘邸の女房目線ではありそうだ。

尚侍の殿、*御念誦堂におはして（玉鬘殿は寝殿東の御仏間にいらっしゃって）、「こなたに（こちらへどうぞ）」とのたまへれば（と仰るので）、*東の階より昇りて（侍従君は庭から東端の階段を上がって）、戸口の御簾の前にゐたまへり（妻戸の御簾前にお座りなさいました）。　*「おおんねんずだう」は何処にあるのか。呼ばれた侍従君が物慣れた様子で「東の階より昇りて戸口の御簾の前にゐたまへり」というのだから、是は別個の独立した建物ではなく、寝殿の母屋の東側に設えた故右家殿の鎮魂の為の仏壇の間と見て置く。　*「ひんがしのはし」は南庭から寝殿の東南妻戸前に上がれる階段だろうか。この寝殿は南庭に突き出していて対屋とは東北妻戸前の渡殿で繋がっていたのかも知れない。さっぱり分からないが、この文が整合する建物を考えると、そういうことなんじゃないかと逆推する。

御前近き若木の梅(御庭先の若木の梅が)、心もとなくつぼみて(じれったそうに蕾を膨らませて)、鶯の初声もいとおほどかなるに(ウグイスの初鳴きもとても和やかに聞こえる初春の日に)、いと好かせたてまほしきさまのしたまへれば(侍従君がとても風情めいた気分になって頂きたい色男ぶりでいらっしゃるので)、人びとはかなきことを言ふに(女房たちは何か最近の面白い色恋話をして欲しいと聞くが)、言少なに心にくきほどなるを(侍従君は言葉少なに勿体ぶって話題を逸らすので)、ねたがりて(憎らしがって)、宰相の君と聞こゆる上臈の詠みかけたまふ(宰相の君と申し上げる上級女房がこう和歌を詠み掛けなさいます)。

「折りて見ば いとど匂ひも まさるやと すこし色めけ 梅の初花」(和歌 44-01)

「少しは折れて下さいな 折角つけた梅の花」(意訳 44-01)

*注に＜宰相の君から薫への贈歌。真淵『新釈』は「よそにのみあはれとぞ見し梅の花あかぬ色香は折りてなりけり（古今集春上、三七、素性法師）を指摘。『完訳』は「「折りて見る」は情交を暗示。「梅の初花」は薫。女から男に戯れた歌」と注す。＞とある。「折る」「匂ひ」「色めく」は＜花＞の縁語なのだろう。上臈なら品があっても、女郎だったら品が無い。くらいの直球に聞こえる。

「口はやし(早詠みだな)」と聞きて(と侍従君はこの歌を聞いて)、

「よそにては もぎ木なりとや 定むらむ 下に匂へる 梅の初花 (和歌 44-02)

「もげた枝より 匂うのは 幹に咲いてる 梅の花 (意訳 44-02)

*注に＜薫の返歌。「梅の初花」の語句をそのまま用いて返す。『完訳』は「内心の魅力を主張して戯れた歌」と注す。＞とある。「折りて見ば」折角の梅の木も「もぎ木(枝が捩がれた枯れ木)」になってしまう、という気の利いた冗句。「口速し」はむしろこの返歌の方に思えるほど出来過ぎていて、返歌あっての贈歌っぽい。

さらば*袖触れて見たまへ(私に折れろと言うより、そちらから触ってみたら如何ですか)」など言ひすさぶに(などと言って戯れると)、 *「袖触れて」は注に＜薫の歌に添えた言葉。『源氏釈』は「色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖触れし宿の梅ぞも」（古今集春上、三三、読人しらず）を指摘。＞とある。この引歌を下敷きにして、女房たちの「まことは色よりも」が「香こそあはれと思ほゆれ」の意だと知れる、という仕掛け。また、「匂ふ」が＜香り高さよりも色映え＞の意で語用される事が多かったことも効いていそうだ。

「まことは色よりも(本当に色よりも香りが良いこと)」と、口々(と女房たちは口々に言って)、引きも動かしつべく*さまよふ(侍従君の袖を引っ張らんばかりに近くでそわそわします)。 *「さまよふ」は＜迷い歩く＞。「迷う」は＜判断できない＞。如何して良いか分からないまま、ソワソワうごめく。

尚侍の君(玉鬘殿が)、奥の方よりゐざり出でたまひて(部屋の奥の方から居座り出ていらっしゃって)、

「うたての御達や(困った人たちね)。恥づかしげなるまめ人をさへ(きちんとしたまじめな人にまで、ちょっかいを出して)、よくこそ、面無けれ(よくもまあ、厚かましい)」

と忍びて*のたまふなり(と小声で仰るのです)。　*「のたまふなり」の助動詞「なり」は説得意(～なのです)か客観視(～のようです)か。玉鬘殿の発言自体は事実らしい。であれば、此処は如何読む方が面白いか、ということで、こういう場面をロングで引いて見ても漠然とした光景にしかならないので、アップで寄るのが正解だ。

「*まめ人とこそ(真面目人と)、付けられたりけれ(名付けられてしまった)。いと屈じたる名かな(真面目なつまらない男とは、何とも情けない名前だ)」と思ひゐたまへり(と侍従君は思っていらっしゃいました)。　*「まめびと」は＜真面目な人＞。この語は頼りになる存在という意味で然るべき場面で客観評価される語用は望ましいが、情緒を解さない野暮天という語意もあるので、面と向かって言われると揶揄に聞こえる、というのは現代語でも同じだ。

*主人の侍従(当家の藤侍従君が)、殿上などもまだせねば(まだ殿上お目見え身分ではないので)、所々もありかで(所々への年始参りもあらずに)、おはしあひたり(この場に居合わせていらっしゃいました)。　*「あるじのじじゅう」は注に＜玉鬘と鬚黒の三男。薫と区別するために「主人の」と言った。『完訳』は「侍従は従五位下だが、新任のためか勅許がない」と注す。＞とある。五位だから殿上が許される、ということではなく、一人一人に勅許が下りるらしい。実際の人事はそういう儀式が重要かとは思うが、帝自身が全員を把握していた筈は無い。帝が認識するのは納言以上か、広くて長官以上あたりだろう。尤も、側近の蔵人は別で、下位の者もお目見えに与ることはあっただろう。やはり太政大臣家であっても、父殿が亡くなると押しは弱まるのかも知れない。また、注には「玉鬘と鬚黒の三男」とあるが、若菜下巻四章二段に「右の大殿の三郎、尚侍の君の御腹の兄君」という続柄説明があり、本文に於いて＜玉鬘腹の兄が故右家殿の三男＞と明示されているのだから、この藤侍従君は＜故右家殿の五男＞と見るべきだ。そしてまた、この藤侍従君は年齢が未だ不明だ。此処に同席しているところから、源侍従君と仲が良いか、少なくも親しいようで、歳も近いのかも知れない。因みに、源侍従君は 16 歳、玉鬘腹三男 26 歳、四男 25 歳といったところだが、この五男は四男とも歳が離れていそうで、大君と中君より下の末子のような感じだ。が、何れ明示は無い。また、源蔵人少将の年齢も不明だが、この人とも年齢が近そうな気はする。というか、尽々さっさと明示して置いて貰いたい。

*浅香の折敷(その若君が浅香材の角盆)、二つばかりして(二つに)、くだもの、盃ばかりさし出でたまへり(菓子と盃を載せて源侍従君に差し出しなさいました)。　*「浅香(さんかう)」は＜香木の一種。「沈香(ぢんかう)」に似ているが質があらく、水に入れると沈みも浮かびもせず、水面と平らになるく。＞と古語辞典にある。良く分からないが、簡素ながら宮びな素材だろうか。「折敷(をしき)」は＜へぎでつくった角盆、または隅切り盆。＞と古語辞典にあるにある。

「大臣は(おとどは、大臣の源殿は)、ねびまさりたまふままに(歳を取るほど)、故院にいとようこそ(故六条院にとても良く)、おぼえたてまつりたまへれ(似ておいででいらっしゃいますが)。この君は(この弟君は)、似たまへるところも見えたまはぬを(似ていらっしゃる所もお見えでいらっしゃいませんが)、けはひのいとしめやかに(感じがとても優雅で)、なまめいたるもてなししもぞ(風情ある物腰は)、かの御若盛り思ひやらるる(故院の若い盛りを想像させます)。かうざまにぞ*おはしけむかし(こんな風でいらっしゃったのかと)」　*「おはしけむかし」の「かし」は疑問意の係助詞「か」に強調の副助詞「し」が付いたもので、推量には違いないが＜～に違いない＞から＜～かもしれない＞まで、その予見信頼度の幅は広く、それは対象体の性質や、それに対する予見者の経験値などに左右されると思われるが、玉鬘は光君の若い時を実際には見ていないので、思い合わせるとか偲ぶという他の検証手掛かりは無しに、源侍従の姿から一方的に光君の若い姿を想像するということになるので、是はどこまでも可能性の一つ以上には成

らない。そして実は、源侍従は入道宮と故衛門督との不義の子なので、源侍従から光君を思い描くのは的外れだ。読者がその可笑しさを楽しく読む場面、と作者が意図した演出、と読者は如何にものそのあざとさに気付きつつ、やはり頬苦楚笑む場面か。

など(などと六条院が)、思ひ出でられたまひて(懐かしく思い出されなさって)、うちしほれたまふ(玉鬘殿はしんみりなさいます)。名残さへとまりたる香うばしさを(源侍従が立ち去った後の残り香の芳しさを)、人びとはめで*くつがへる(女房たちはさかんに惜しみがります)。　*「くつがへる」は「覆る」で＜転覆する。倒れ滅びる。＞だが、古語辞典に＜補助動詞的に用いて、動詞の意味を誇張的に強める。＞という語法が説明されている。即ち、「愛で覆る」で＜盛んに褒め騒ぐ＞。

［第三段　梅の花盛りに、薫君、玉鬘邸を訪問］

侍従の君(源侍従は)、まめ人の名をうれたしと思ひければ(堅物の名を鬱陶しく思ったので)、二十余日のころ(一月の二十日過ぎの)、梅の花盛りなるに(梅の花盛りの日に)、「匂ひ少なげに取りなされじ(色気が少ないと言われてはいたくない)。好き者*ならはむかし(遊び人を真似てみようか)」と思して(とお思いになって)、*藤侍従の御もとにおはしたり(玉鬘邸の藤侍従の所に義理の甥にして友人という誼で姫君に近付く手引きを頼って出掛けなさいます)。　*「ならはむ」は「ならふ(倣う、習う、真似る)」に意志の助動詞「む」が付いて＜真似てみる＞。「かし」は試行意の助詞「か」と強調の副助詞「し」で＜ここは一つ遣ってみるか＞くらいの言い方。「好き者ならはむかし」は如何にも十代の少年が意気がって言う台詞。　*「藤侍従の御もと」を源侍従が訪ねるというのは、一章四段に「さるべき折々の遊び所には、君達に引かれて見えたまふ時々あり」と源侍従が玉鬘邸の「君達」と友達付き合いをしていた事が語られていたので、この日も義理の甥である友人を訪ねた、という意味だろうか。しかし、藤侍従は姫君たちの弟君でもあるので、「好き者ならはむかし」と意気込んでいる以上は、目当ては姫君であって、その弟君に姫君に近付く手引きを頼む、という文意はありそうだ。が、その辺の関係性に具体的な言及が無く、源侍従の思惑や藤侍従の事態の理解度などに確たる手応えが無い。で、この「おはしたり」をどのように位置付けて言い換えれば良いのかは、当時の宮廷読者とは違って私には判断できない。が、単に＜出掛けた＞では文意が成立しないので、もうこの際は目を瞑って、可能性でしかないが、上記の予見を明示補語してしまう。

中門入りたまふほどに(源侍従が中門から邸内にお入りになると)、同じ直衣姿なる人立てりけり(同じ直衣姿の人が庭先に立っていました)。隠れなむと思ひけるを(その人は隠れようと思ったようでしたが)、ひきとどめたれば(引き留めてみると)、この常に立ちわづらふ少将なりけり(此処にいつも立ち寄っていた源少将なのでした)。

「寝殿の西面に(寝殿の西面で)、琵琶、箏の琴の声するに(琵琶や箏の弦楽器を演奏する音がするので)、心を惑はして立てるなめり(源少将は姫君が弾いているのかと夢中になって立ち聞きしているようだ)。苦しげや(辛そうだな)。人の許さぬこと思ひはじめむは(親の許しが無い女を恋するのは)、*罪深かるべきわざかな(罪深いことのようだな)」と思ふ(と源侍従は思います)。*「罪深かるべきわざかな」の「べし」を如何読むべきか。此処は源侍従が＜人の振り見て我が身を思う＞場面だ。源侍従は源少将の辛そうな様子を見て、姫君への恋路を茨の道に思う。が、だからといって止める心算はなさそうだ。姫に言い寄るのは玉鬘の意に反するので、「罪深くある」のは論理的合理性がある、という意味で「べし」と語用できる。が、それでも自分の冥利として、あえて姫に言い寄ろうとするなら、その「罪深くある」合理性を、数ある内の

一つの事情として突き放してみる心理が働く。そういう場合の「べし」は、そういうことも＜あるようだ＞と遠くに離して見る言い方をする、のだろう。

琴の声もやみぬれば(琴の音も止んだので)、

「いざ(さあ近くへ行きましょう)、しるべしたまへ(案内して下さい)。まろは、いとたどたどし(私は姫の御部屋近くへの道が分かりませんので)」

とて(と言って源侍従が)、ひき連れて(源少将を引き連れて)、西の渡殿の前なる紅梅の木のもとに(西の渡殿の前にある紅梅の木の下で)、「*梅が枝」をうそぶきて立ち寄るけはひの(催馬楽の「梅が枝」を口ずさんで立ち寄って来ている気配が)、花よりもしるく(花の香よりもはっきりとわかるように)、さとうち匂へれば(さっと匂ったので)、妻戸おし開けて、人びと、*東琴をいとよく掻き合はせたり(南西の妻戸を押し広げて姫付きの女房たちが和琴をとても良く源君たちの歌に合わせて弾きました)。　*「梅が枝」は梅枝巻一章四段の薫物合わせの後宴の場面で今の藤大納言が謡った催馬楽で、歌詞は「梅が枝に　来居る鶯　や　春かけて　はれ　春かけて　鳴けどもいまだ　や　雪は降りつつ　あはれ　そこよしや　雪は降りつつ」という口説き文句の宴会物らしい。24 年ほど前の話。　*「東琴」は「あづま」と読みがあり＜六弦和琴＞のことらしい。

*女の琴にて(女の弾く律調の琴の音なので)、呂の歌は(男が歌う呂の歌は)、かうしも合はせぬを(こう上手くは合わせ難いのを)、いたしと思ひて(大した弾き手だと思って)、今一返り(もう一度)、をり返し歌ふ(源君たちは「梅が枝」を繰り返し謡うが)、琵琶も二なく今めかし(琵琶も又と無く派手で呂の歌に合っていました)。　*「女の琴にて呂の歌はかうしも合はせぬを」は注に＜律はわが国固有の俗楽的音階で秋の調べ、呂は中国伝来の正式な音階で春の調べという。＞とある。が、音階については弦楽器は琴柱で絃長を変えれば変調できるので、どんな歌の調子でも合奏は可能だ。だから、この注釈では此処の文意は分からない。で、無理矢理、律が女らしい柔らかな音調で、呂が男らしい太い音調だとして、行き成りでは合わせ難い、という筋で読んで置く。

「*ゆゑありて*もてないたまへるあたりぞかし(たしなみ深い応対を心掛けていらっしゃる御邸だ)」と、心とまりぬれば(と源侍従は感じ入ったので)、今宵はすこしうちとけて(今宵は先日よりは少し打ち解けて)、はかなしごとなども言ふ(女房たちに褒め言葉なども口にします)。　*「ゆゑ」は＜由緒＞で、文芸に於いては＜教養・素養＞を意味し、「ゆゑありて」は＜教養高い。造詣が深い。情趣に長けている。たしなみ深い。＞あたり。　*「もてない」は「もてなす」の連用形「もてなし」のイ音便。「もてなす」は＜遇する＞だが、此処では＜遇する態勢を整えている→応対を心掛けている＞くらい。

内より和琴さし出でたり(御簾内から和琴が差し出されました)。かたみに譲りて(源君らは互いに譲り合って)、手触れぬに(楽器に手を触れないので)、侍従の君して(藤侍従をして)、尚侍の殿(玉鬘殿が)、

「*故致仕の大臣の御爪音になむ(あなたの和琴は名手といわれた実父の故藤原殿の御爪音に)、通ひたまへる(よく似ていらっしゃる)、と聞きわたるを(と伝え聞いておりますので)、*まめやかにゆかしうなむ(本当に聞いてみたく存じます)。今宵は、なほ*鶯にも誘はれたまへ(今宵はどうぞ紅梅に寄り来て鳴くウグイスにも誘われなさって、お一つお聞かせ下さい)」　*「故致仕の大

臣(こちじのおとど)」は故藤原殿。玉鬘の実父であり、和琴の名手とされていた。　*「まめやかに」は＜本心から、本当に＞。　*「鶯にも誘はれたまへ」の言い回しは、注に＜『奥入』は「花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯誘ふしるべにはやる（古今集春上、一三、紀友則）。『異本紫明抄』は「鶯の声に誘引せられて花の下に来る草の色に拘留せられて水の辺に坐り」（白氏文集巻十八、春江・和漢朗詠集上、春、鶯）を指摘。＞とある。女が漢籍をひけらかすのは嫌味らしいし、私が漢文が苦手なので、古今集の歌を引いた言い方だと思って置く。「鶯」とは紅梅を愛でて演奏に興じる女房たちだろうか。本物のウグイスかも知れない。

と(と源侍従に)、のたまひ出だしたれば(仰って促したので)、「*あまえて*爪くふべきことにもあらぬを(照れて爪を噛んでいる場合じゃない)」と思ひて(と思って)、をさをさ心にも入らず掻きわたしたまへるけしき(進んで弾くでもなく掻き鳴らしなさる源侍従の姿に)、いと*響き多く聞こゆ(女房たちは大いに歓声を上げます)。　*「あまゆ」は＜甘える＞であり＜照れる、恥ずかしがる＞とも古語辞典にある。現代語の「甘える」と同じで＜甘ったれて相手の許容に依存する姿勢＞を示す語らしい。　*「爪くふ」は「爪食ふ」で＜爪を噛む＞。　*「響き多く聞こゆ」は琴の音に掛けた言い回しだが、「けしき」を受ける「ひびき」は＜女房たちの嬌声＞で、「聞こゆ」は＜噂が立つ＞。

「常に見たてまつり睦びざりし親なれど(藤原殿はいつもお会い申して親しんでいたのではない親だが)、世におはせずなりにきと思ふに(この世にいらっしゃらなくなってしまったと思うと)、いと心細きに(とても心細くて)、はかなきことのついでにも思ひ出でたてまつるに(ちょっとしたことから思い出され申して)、いとなむあはれなる(とても悲しくなります)。

おほかた(全体に)、この君は(この源君は)、あやしう*故大納言の御ありさまに(不思議と故藤大納言の御姿に)、いとようおぼえ(とてもよく似て)、琴の音など、ただそれとこそ、おぼえつれ(琴の音など正にその人にように思えます)」　*「故大納言」は注に＜柏木。薫の実の父親。＞とある。故衛門督藤君は亡くなる直前に今上帝から大納言に昇進の宣旨を受けた(柏木巻三章一段)。

とて泣きたまふも(と言って玉鬘殿がお泣きになるのも)、古めいたまふしるしの(歳を取った証拠の)、*涙もろさにや(涙もろさでしょうか)。　*「涙もろさにや」は注に＜語り手の批評。『首書』は「草子地也」と指摘。『完訳』は「語り手の言辞。薫の出生の秘事をはぐらかし、老の涙かとする」と注す。＞とある。「はぐらかし」と言うよりは、血縁者である玉鬘の、その血を嗅ぎ分ける女の直感が、この玉鬘邸の女房たちには、ただの偶然としか見えていなかったらしい、という状況描写だろう。

[第四段　得意の薫君と嘆きの蔵人少将]

少将も(源少将も)、声いとおもしろうて(声がとてもきれいで)、「*さき草」謡ふ(催馬楽の「この殿は」を謡います)。　*「さきくさ」は注に＜『源氏釈』は「このとのは(この殿は) むべも(宜も) むべもとみけり(宜も富みけり) さきくさの(三枝の) あはれさきくさの(あはれ三枝の) はれさきくさの(はれ三枝の) みつばよつばのなかに(三つば四つばの中に) とのづくりせりや(殿造りせりや) とのづくりせりや(殿造りせりや)」(催馬楽、この殿は)を指摘。＞とある。「さきくさ」はこの催馬楽「この殿は」の四節「三枝の」のことで、つまりは広く「この殿は」と題されている催馬楽を謡った、という文意らしい。「三枝(さきくさ)」は枝分かれを子孫繁栄または広く末広がりの象徴として目出度さを言い表す言葉らしい。宴席の祝い歌。

さかしら心つきて(分別ぶって)、*うち過ぐしたる人もまじらねば(行儀作法を口うるさく注意する年長者がいなかったので)、おのづからかたみにもよほされて遊びたまふに(君達は自然と互いに打ち興じて謡いなさるが)、　*「うち過ぐしたる人」には敬語遣いが無い所為か、渋谷訳文には＜出過ぎた女房＞とある。行儀作法に口煩い、と補語したい。ところで、「うちすぐす」には＜無駄に歳を取る＞みたいな陰口語感もあるので、玉鬘邸の女房からすれば、藤侍従に対して過度に兄貴ぶった、とは言えそれは偉ぶると言うよりは父譲りの実直さが成せる責任感の表れかも知れないが、腹違いの太郎君や次郎君あたりを揶揄した言い方、とは言えそれらしい具体的記述は未だ皆無だが、に見えなくも無い。で、隠語だけに敬語が無いみたいな。しかし隠語だけに、言い換え文での明示も出来ない、みたいな。

主人の侍従は(当家の藤侍従は)、故大臣に似たてまつりたまへるにや(故右家殿に似なさった所為か)、かやうの方は後れて(こうした遊びごとは苦手で)、盃をのみすすむれば(酒ばかり飲んでいたので)、「*寿詞をだにせむや(祝い歌の一つも謡えないのか)」と(と源君達に)、恥づかしめられて(からかわれて)、　*「寿詞」は「ことぶき」と読みがあって＜祝い歌＞と訳文がある。ざっと＜祝言＞だろうが、この場では確かに＜祝い歌＞を意味していそうだ。

「*竹河」を同じ声に出だして(催馬楽の「竹河」を源君たちと一緒に声を出して)、まだ若けれど(まだ子供っぽいが)、をかしう謡ふ(上手に謡います)。　*「たけかは」は注に＜『源氏釈』は「竹河の　橋のつめなるや　橋のつめなるや　花園に　はれ　花園に　我をば放てや　我をば放てや　めざしたぐへて　(少女伴へて)」（催馬楽、竹河）を指摘。＞とある。「めざし」は「目刺し」と漢字表記があり＜子供の頭髪を目を刺すぐらいの長さに切りそろえたもの。＞と古語辞典にあり、転じて＜子供のこと。少女。＞を言うらしい。下衆の勘繰りで読めば、この歌は竹川橋の端許の歓楽街で女遊びがしたい、に聞こえる。竹川橋は三重県多気郡(たきぐん)辺りにあった竹林を流れる多気川(たけがわ)に架かっていた橋、と一般的に考えられているらしく、その道は伊勢神宮に続く伊勢路だった、ということらしい。神宮は尊厳以前に交易で賑わった繁華街の象徴だったと考えてみるのも面白い。勿論、繁華街も歓楽街も今の様式とは別物だろうが、むしろ今の国家体制の複雑な組織機構の維持に必要な化物じみた権威より、古代国家の統制は素朴で分かり易い実利の実感に基づく一定規模集団の共通認識で運営されていたんじゃないかな。そう思うと、この「竹河」が男踏歌で歌われる楽しさが少しは味わえる気がする。というのも、此処から以下の文が正月催事の男踏歌を下敷きにした話運びとなっているらしく、此処で男踏歌を見直して置かないと、当時の宮廷読者ならぬ私如きには、到底先を読み進めそうにないからだ。それでも、辛うじて男踏歌に思い至ったのは、先の初音巻三章一段に正月十四日の催事として男踏歌の模様が描写されていたお蔭だ。「今年は男踏歌あり」と初音巻に語られていたのが 26 年ほど前の出来事かと思うが、この年も男踏歌があったらしい。この日は二十日過ぎなので、つい先日の賑わいだったのだろう。

簾のうちより土器さし出づ(「竹河」の謡いということで、男踏歌の宴を模して、簾の脇から女房が君達に盃を差し出します)。

「酔のすすみては(酔いが進んでは)、忍ぶることもつつまれず(隠し事も出来ません)。ひがことするわざとこそ聞きはべれ(それが失敗の元とも聞いております)。いかにもてないたまふぞ(私に何を言わせようとなさるのですか)」と(と源侍従は)、とみにうけひかず(直ぐには盃を受けません)。

小袿重なりたる細長の(小袿を何着も重ねた細長装束一式の)、*人香なつかしう染みたるを(自分の移り香が親しげに染みたものを)、取りあへたるままに(在り合わせの褒美品として)、被けたまふ(玉鬘殿は源侍従に下げ渡しなさいます)。　*「人香(ひとが)」は＜人の移り香。＞と古語辞典にある。手近にあった自分の衣服。用意した引出物が無かったし、義理の弟君だし。

「*何ぞもぞ(是は何と)」など*さうどきて(などと褒美に驚いて見せて)、侍従は(源侍従は)、主人の君にうち被けて去ぬ(当家の藤君にそれらを渡し預けて帰りました)。　*「何ぞもぞ」は注に＜薫の詞。男踏歌にちなんだ言葉遣い。＞とある。男踏歌なら引出物は当然に用意されてる。それでも演者は先ずは、御礼を頂戴する理由はない、と褒美が有る事に驚いて見せて固辞する、というのが儀礼だった、ということか。　*「さうどく」は「騒どく」と当てられ＜陽気に騒ぐ。はしゃぐ。＞と古語辞典にある。此処では、大袈裟に＜驚いてみせる＞のだろう。

引きとどめて被くれど(藤君は源君を引き留めて渡し返そうとしましたが)、「*水駅にて夜更けにけり(今日の踏歌は水駅でお開きだ)」とて、逃げにけり(と言って源君は逃げてしまいました)。　*「みづうまや」は男踏歌で正規の立ち寄り所である貴家の「飯駅(いひうまや)」に対して、簡易休憩所みたいな言い方だが、立ち寄り所である以上は実際には高家だ。ただ、演者の陰口として＜水臭い家＝愛想の無い、土産の少ない家＞をいう隠語語用があった、と古語辞典にある。

少将は(源少将は)、「この源侍従の君のかうほのめき寄るめれば(源侍従君がこのように姫への懸想をほのめかしてこの邸に立ち寄るようであれば)、*皆人これにこそ心寄せたまふらめ(姫も殿も皆この人を気に入りなさるのだろう)。　*「みなひと」は「たまふらめ」と敬語遣いなので、女房たちではなく玉鬘の家族だろうが、「ほのめき寄る」対象は姫なのだろう。

わが身は、いとど*屈じ(我が身はますます縮こまり)いたく思ひ弱りて(ますます気弱になるばかりで)、あぢきなう(厭になる)」ぞ恨むる(と嘆くのです)。　*「屈ず」は「くんず」と読むらしい。自信を失くす。身が縮む。

「人はみな花に心を移すらむ、一人ぞ惑ふ春の夜の闇」(和歌 44-03)

「香も無く咲いた梅の花、いかに人知る春の夜の闇」(意訳 44-03)

*注に＜蔵人少将の詠歌。真淵『新釈』は「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる」(古今集春上、四一、凡河内躬恒) を指摘。＞とある。「まどふ」の語に＜狂い咲き＞の意を込めることは出来るのだろうか。ただ闇に思い悩むというだけの筋なら、ずいぶん平坦な歌だ。

うち嘆きて立てば(溜息混じりにこう詠んで帰ろうと座を立てば)、内の人の返し(御簾内の女房がこう返歌しました)、

「をりからやあはれも知らむ梅の花、ただ香ばかりに移りしもせじ」(和歌 44-04)

「折柄も良く梅の花、香り立つ日の珍しさ」(意訳 44-04)

*注に＜女房の返歌。「香ばかり」「かばかり」の掛詞。蔵人少将を慰める。＞とある。偶の客が偶々歓迎されただけ、みたいな。

朝に(あしたに、翌朝に)、四位侍従のもとより(源侍従のところから)、主人の侍従のもとに(藤侍従のところに)、

「昨夜は(よべは)、いと乱りがはしかりしを(失礼しましたが)、人びといかに見たまひけむ(皆さん如何お思いでしょうか)」

と、見たまへとおぼしう(女たちに御覧に入れるようにとの心算らしく)、*仮名がちに書きて(仮名混じり文で書いてあって)、　*「仮名がち」は仮名文字が多い文。当時の庶民は文盲で、貴族は男同士の文なら漢字で書いたらしい。「仮名勝ち」なので、女たちにも「見たまへとおぼしう」ということらしい。

「竹河の橋うちいでし一節に、深き心の底は知りきや」(和歌 44-05)

「嫁乞いを歌う祝い歌、ただの座興じゃありません」(意訳 44-05)

*注に＜薫から玉鬘への贈歌。催馬楽「竹河」の詞章を踏まえる。「橋」と「端」の掛詞。「竹」－「節」、「河」－「深き」－「底」は縁語。＞とある。掛詞や縁語遣いは有るにしても、是は歌なのか。あまりに文意が立って、ちょっと気の利いた言い回しではあるものの、現代語文みたいな分かり易い客観性のある用件状みたいなもんで、情緒なり歌心なりは何処にあるのか。勿論、気の利いた言い回しこそは人柄を示す歌心ではあるだろうが、「深き心の底」を実感ある言葉で訴えてこそ相手に響こうかというもので、思いの深さを「深き心」と表現したのでは丸で他人事だ。ホットであるべき場面でクールなのはクールじゃない。源侍従はクールが売りの筈なのに意外だ。

と書きたり(と歌が詠んであります)。寝殿に持て参りて(藤侍従はこの手紙を寝殿に持って上がって)、これかれ見たまふ(殿や姫が御覧になります)。

「手なども(字も)、いとをかしうもあるかな(とても上手です)。いかなる人(他に誰が)、今よりかくととのひたらむ(この若さでこんなに出来が良くいらっしゃいましょうか)。幼くて(幼くして)、院にも後れたてまつり(父六条院にも先立たれ申し)、母宮の*しどけなう生ほし立てたまへれど(母入道宮がゆったりとお育て申しなさったが)、なほ人にはまさるべきにこそあめれ(それでも人より優れているようです)」　*「しどけなし」は＜しまりがない、緩い、甘い＞。悪口ではない、と古語辞典にあるが、宮様に対して言える言い方だと＜厳しくない→おうような、ゆったりしている＞くらいか。

とて、尚侍の君は(と言って玉鬘殿は)、この君たちの(自分の子供たちの)、手など悪しきことを恥づかしめたまふ(字が下手な事を非難なさいます)。返りこと(藤侍従の返事は)、げに、いと若く(確かにとても未熟な字で)、

「昨夜は(昨夜はあなたが)、*水駅をなむ(此処を水駅と言って早々に逃げ帰りなさった事について)、*とがめきこゆめりし(皆が非常に残念がっていたとのことです)。　*「水駅をなむ」は渋谷訳文に＜水駅とおっしゃってお帰りになったことを＞とある。つまり、「みづうまや」という語に＜源侍従が「水駅にて夜更けにけり」と言って逃げ帰った昨夜の事＞を象徴代名詞化させた語用をしている、ということらしい。今でも「例

のアレ」と言って特定の事態を指し示すような、是に似た語用は日常的にある。が、こういう言い回しは理屈で考えると特殊語用なので難文に見える。文脈と語感で直感的に分かるものだと思うので、この文意提示には敬意を表したい。確かに、「アレ」よりは「水駅」の方が気が利いている。 *「とがむ」は＜難じる＞というのが基本的な語用だが、「とがめきこゆ」は＜hate to say＞だ。また、是は源侍従が尋ねて来た「人びといかに見たまひけむ」に対する回答なので、主語は「人びと」であり、藤侍従からすれば伝聞推量なので「めりし」という言い方になる。

竹河に夜を更かさじといそぎしも、いかなる節を思ひおかまし」（和歌 44-06）

何を急いでそそくさと、帰る御用のあったやら」（意訳 44-06）

*注に＜藤侍従の返歌。「夜」と「よ（竹の節と節の間）」の掛詞。「竹」－「節」は縁語。＞とある。気の利いた言い回しに皮肉を込める。女郎めいているが艶があって、源侍従の贈歌より余程風情がある詠みっぷりだ。

げに(正に)、この節をはじめにて(この節をきっかけにして)、この君の御曹司におはして(源侍従はこの藤侍従の御部屋に入り浸って)、けしきばみ寄る(姫への懸想を言い寄ります)。少将の推し量りしも*しるく(源少将の予想通りに)、皆人心寄せたり(皆が源侍従を好感しました)。侍従の君も(藤侍従も)、*若き心地に(駆引きのない素直な気持ちで)、*近きゆかりにて(源侍従を姉の婿という近親者として)、明け暮れ睦びまほしう思ひけり(毎日会って親しくしたいと思っていました)。 *「著し」は＜顕在化する→予想通りになる＞。 *「若き心地」は＜未熟な判断＞のようにも聞こえるが、藤君も元服した成人で、侍従は五位らしいので、何故殿上でないのか不思議だが、この「若き」は＜瑞瑞しく素直な＞と読んで置く。 *「近きゆかり」は与謝野訳文に＜姉の婿にして＞とあり、「けしきばみ寄る」に対応した言い方として分かり易いので、従う。

[第五段　三月、花盛りの玉鬘邸の姫君たち]

弥生になりて(三月になって)、咲く桜あれば(咲く桜もあれば)、散りかひくもり(花吹雪も舞って)、おほかたの盛りなるころ(全体が桜の花盛りになるころ)、のどやかにおはする所は(姫君たちが伸びやかに暮らしていらっしゃる玉鬘邸は)、*紛るることなく(男たちが邸内で公務に取り込むこともなく)、*端近なる罪もあるまじかめり(女が縁側近くまで出て花見をしても人目に付く恐れはなさそうです)。 *「紛る」は＜入り混じる→入り交じる→忙しく立ち働く＞ということらしい。*「端近(はしぢか)なり」は＜あさはかなことだ＞という言い方らしいが、この「はしぢかなるつみ」は正に具体的に＜女が花見で縁側近くの廂際まで出て人目に付く恐れ＞を示しているのだろう。

そのころ、*十八、九のほどやおはしけむ(ちょうど 18、9 歳の頃でいらっしゃいましたか)、御容貌も心ばへも、とりどりにぞをかしき(御姉妹は器量も性格もそれぞれ良いのですが、)。 *「十八、九のほど」は注に＜玉鬘の娘姉妹の年齢。『評釈』は「古女房が昔の有様を思い出して語っている痕跡の一つである。「けむ」と推量しているのは語り手の女房である」と注す。＞とある。やっと年齢が明示された。と思ったら、また分かり難い言い方だ。「とりどりに」とあるのだから、「おはす」の主語は「姫君たち」のようにも見えるが、是は妹が 18 歳で姉が 19 歳と取って良いんだろうか。この物語を読む内に、主語省略の紛らわしさは、特にこういう言い回しに於いて煩わしい、ということに私は今までに何度かブチ当たって来た。下に「姫君は」と姉に話題を絞った言い方をしているので、是は姉の年齢を 18,9 歳ほどと曖昧に言っているようにも思える。普通は、「十八、九のほど」は一人の人物に対して言う曖昧表現だ。また、「御容貌も心ばへも、とりどりにぞをかしき」は＜姉妹それ

ぞれに魅力的だが＞という挿入句とも見做せる。即ち、此処は句点ではなく読点。それに、この姉妹が年子だという話も今までになかったように思うし、「十八、九のほど」は姉の年齢と見るのが順当には思える。ところが、下に同腹兄君の年齢が示されて、その兄君と源侍従こと薫君とは年齢比較が可能なので、全体の整合性を考えるとその兄君の年齢こそを目安にするべきと、年齢考察はその項目に回す。ただ、年齢は実社会の人間関係に於いて非常に重要な基本情報で、だからこそ、このノートでも登場人物の年齢にこだわっているし、実社会でも、それが重要な情報だけに基本的に各個人はそれを秘匿して行動制限を受けないように防御しているので、簡単に聞き出せない場合が多く、その推定は各人各様に日常的な関心事で有る事が多いと思うが、此処の場面の登場人物はそれを読者に秘匿すべき秘密めいた立場にある者ではなく、読者以外は互いに分かり合っている家庭内の話だというのに、その設定を読者が知らされないというのは、女房目線とは著しく違う余所者扱いで、推理の楽しみなど無い単に面倒な作業で納得し難い。それでも、誰にも文句は言えず、厭なら止せば、と超然と存在するこの物語を読み進む以上は、是も楽しみの一つ、と思う他は無い。

姫君は(姉君は)、いとあざやかに気高う(とても際立って品が良く)、今めかしきさましたまひて(はなやかでいらして)、げに(なるほど)、ただ人にて見たてまつらむは(臣下を結婚相手に縁付け申すのは)、似げなうぞ見えたまふ(不相応にお見えになります)。

*桜の細長(桜の色柄の細長に)、山吹などの(山吹色の上着などの)、折にあひたる色あひの(季節柄の色合わせを)、なつかしきほどに重なりたる裾まで(優しい感じで重ね着した内着の裾まで)、愛敬のこぼれ落ちたるやうに見ゆる(愛らしさがこぼれ落ちるように見える)、御もてなしなども(着こなしなども)、らうらうじく(板に付いていて)、心恥づかしき気さへ添ひたまへり(重々しい気品さえ備えていらっしゃいます)。　*「桜の細長」は白地に薄紅の桜模様を浮かし柄に綾織した飾り掛け布、だろうか。細長はこの物語にはよく登場する装束で、表着の上に重ね着する飾り服で、実用性から言えば無駄に後に長く引きずる長い織物、のように風俗博物館サイト他の画像から想像するが、今の一般装束には引き継がれていないようで、不明な点は多いらしい。また、無駄に後に長く引きずる、というのは、束帯の下襲を思わせるが、如何にも礼服ならではの見せる装いだ。衣服の実用性からは無意味で、権威や儀典格式の象徴性を示す衣装様式で、着用者の好みや着こなしも当然その見映えには反映されるだろうが、個人的な趣味よりは確立された様式に則って着用されるものだろうし、着用者も正にその儀典でのあるべき立場を演じる、という意識で立ち振る舞うものなのだろう。

今一所は(もう一人の妹君は)、薄紅梅に(薄紅梅の細長に)、桜色にて(桜色の重ねの色合わせの表内着姿で)、柳の糸のやうに(柳の枝のように)、たをたをとたゆみ(しなやかな物腰で)、いとそびやかになまめかしう(とても背が高く溌剌として)、澄みたるさまして(取り澄ました表情をして)、重りかに心深きけはひは(落ち着いて聡明そうな所は)、*まさりたまへれど(勝っていらっしゃるが)、匂ひやかなるけはひは(艶やかさに於いては)、*こよなしとぞ人思へる(姉君には及ばないとのように女房は思っていました)。　*「まさる」は比較優位で比較対象は姉君に他ならない。で、「たまへれど」の「ど」は上述項の反論を下に述べる時の接続助詞なので、上述項に於いては妹が優位だが下述項に於いては姉に劣る、という論理構造が示されている。　*「こよなし」は＜この上ない。甚だしい。＞だが、優劣どちらにも使われる語、とのこと。此処では劣意であることが構文で示されている。

碁打ちたまふとて(碁を打ちなさるということで)、さし向ひたまへる*髪ざし(碁盤を挟んで向かい合っていらっしゃる御姉妹の髪の美しさと)、*御髪のかかりたるさまども(その座り姿は)、

いと見所あり(とても見応えがあります)。　*「かんざし」は「髪状」との表記で＜額の上の髪の生えぐあい。髪のようす。＞と大辞泉にある。ざっと、髪の美しさ、と見て置く。　*「みぐしのかかりたるさま」は髪が肩から越に掛かって床に広がっている形だろうか。ざっと、座姿、と見て置く。

*侍従の君(弟の侍従君が)、*見証したまふとて(勝負審判をなさるということで)、近うさぶらひたまふに(姉妹の側にお座りになっていると)、*兄君たち*さしのぞきたまひて(兄君たちが几帳越しに覗き込みなさって)、　*「侍従の君」は姉妹の弟だという明示は無い、かと思うが、この文で「兄君たち」は姉妹の目線で語られているとすれば、やはり侍従は末子として皆に可愛がられているように見える。　*「見証」は「けんぞ」と読みがあり＜傍らで見ること。特に、囲碁・蹴鞠(けまり)・双六(すごろく)などに立ち合い、勝負の判定をすること。＞と大辞泉にある。　*「兄君たち」は「せうとぎみたち」ではなく「あにぎみたち」とローマ字表記がある。玉鬘腹の三男と四男なのだろう。侍従君は五男。　*「さしのぞく」は御簾内を覗き込むのか、御簾内で几帳越しに覗き込むのか。実の兄弟なので御簾内の近さながら、妹には女なので遠慮して几帳越し、と思って置く。

「侍従のおぼえ(侍従の信任は)、こよなうなりにけり(たいしたもんだ)。御碁の見証許されにけるをや(姉御たちの碁の審判を任されたとはな)」

とて(と言って)、おとなおとなしきさまして*ついゐたまへば(年長者らしい態度でそのままお座りなさったので)、御前なる人びと(周りの女房たちは)、とかうゐなほる(あれこれ居ずまいを正します)。　*「ついゐ」は「急居(俄かに座る)」らしい。

*中将(同腹長兄の左近中将が)、　*一段に「この殿の左近中将、右中弁、侍従の君なども、やがて大臣の御供に出でたまひぬ」と語られていた。故右家殿の三男で、玉鬘腹では長兄だ。

「宮仕へのいそがしうなりはべるほどに(公務にかまけている内に)、人に劣りにたるは(弟に出し抜かれたとは)、いと本意なきわざかな(実に心外だ)」

と愁へたまへば(と愁いて見せなさると)、

「弁官は、まいて(弁官は武官以上に公務が多く)、私の宮仕へおこたりぬべきままに(実家への奉仕が怠りがちだといって)、さのみやは思し捨てむ(それだけでお忘れになるとは)」

など申したまふ(などと同腹次兄も申しなさいます)。

碁打ちさして(兄君たちにこのように戯れ掛けられた姉妹は碁を打ち差して)、恥ぢらひて*おはさうずる(恥らい合っていらっしゃいます)、いとをかしげなり(とても良い風情です)。　*「おはさうず」は「おはさひす」の音便とあり、「おはさひす」は「おはさふ」の連用形「おはさひ」に丁寧語の助動詞「す」が付いたもので、「おはさふ」は「おはしあふ(御座合ふ、居合わせていらっしゃる、し合っていらっしゃる)」の約語とのことで、意味は同じ複数称の主語に使う尊敬語、らしい。

「*内裏わたりなどまかりありきても(内裏の各役所などに出向き申しましても)、*故殿おはしまさましかば(父上が御存命でいらっしゃったら、さぞより厚遇されたことだろう)、と思ひたまへらるること多くこそ(と存じられる事が多くあります)」　*「うちわたり」は＜宮中内＞だが、「まかり

ありきて」とあるので、自邸から御所に参内するのではなく、帝の御用で各役所に出向く、という文意なのだろう。「まかる」は「まゐる」の反語で「真離る⇔真居る」だろうか、貴所から＜出る⇔入る＞という概念らしく、「まかる」と言えば＜退出する＞の謙譲語と古語辞典にある。　*「故殿おはしまさましかば」の仮定文は、下の述語が省かれている。仮定文にはこうした言い放しはよくある。というのも、こういう大雑把な仮定発想に於いては、その述意は、現状不満から見る仮想期待値か、現状満足から見る仮想危険値か、のどちらかで、その現状の是非は、現場に居る者にとっては自明の認識であり、こうした書面にあっては文脈から容易に察知できる見識、である事が殆んどだからだ。で、此処では文脈から、また下に「涙ぐみて見たてまつりたまふ」とあることからも、発言者の現状認識は＜非＞であろうと推察できる。なお、この発言者は＜左近中将＞らしい。

など(などと中将は)、涙ぐみて見たてまつりたまふ(妙齢の妹御を入内を案じて涙ぐみながら拝し申しなさいます)。

*二十七、八のほどにものしたまへば(右中弁が 27 歳、左中将が 28 歳ほどになっていらっしゃって)、いとよくととのひて(この兄君たちはとても良い縁談に恵まれていて、安定していたので)、この御ありさまどもを(この妹君たちの縁組についても)、「いかで(何とかして)、いにしへ思しおきてしに(父上が予ねて目指しなさっていた入内に)、違へずもがな(違うことなく適えたいものだ)」と思ひゐたまへり(と思っていらっしゃいました)。　*「二十七、八のほどにものしたまへば」は注に＜左中将の年齢。『完訳』は「左近中将の誕生は、真木柱。今は二十五歳のはず」と注す。＞とある。私の計算では左近中将が 26 歳、右中弁が 25 歳、だと思っていたが、さて、本文にこう明示がある以上は、本文に従って年齢を整理し直す他は無く、むしろこの明示を幸いに思って、この機会に改めてみたい。ところで、中将と中弁は年子である事が若菜上巻に明示されているので、この「二十七、八のほどにものしたまへば」は中将が 28 歳で中弁が 27 歳だと読んで置きたい。となると、先の姫君たちの「十八、九のほどやおはしけむ」も姉君が 19 歳で、妹君が 18 歳と読むべきなのかも知れない。後で個別の明示があれば見直すが、それまでは折角の明示なので、個別特定に難は有るものの、記された数字は尊重して置く。その他に、当巻に於いて明示された年齢は一章四段に「四位侍従そのころ十四、五ばかりにて」とあって、玉鬘殿がこの義理の弟侍従を娘の婿候補に意識していたという話があり、そういう事情説明に続いて玉鬘邸に諸君が年始参りに集ったという二章一段の話が語られている。だから、読み方によっては一章四段の「四位侍従そのころ十四、五ばかりにて」の「そのころ」と、当段の「そのころ十八、九のほどやおはしけむ」と姫君の年齢明示があった「そのころ」が、ほぼ同時期を示しているようにも見える。だから、注に左近中将が「今は二十五歳のはず」とあるのも一理はあるワケだ。というのは、源侍従の薫君が生まれた柏木巻における入道宮の年齢などから、源侍従と左近中将とが 10 歳違いだということは示されていて、四位侍従が 15 歳なら左近中将は 25 歳になる計算だからだ。玉鬘殿の姫君たちの年齢は、当巻の当段に於いて初めて示されたので、直接関連付けられるのは、この兄君たちの「二十七、八のほどにものしたまへば」だけしか無い。で、これらの辻褄が合う見方となると、「四位侍従そのころ十四、五ばかりにて」の「そのころ」は玉鬘殿が薫君を婿候補に意識し出した時の説明、ないし侍従に就いた時の薫君の年齢くらいに見て、今の話題現在の年齢とは別で、今現在は姫の「そのころ十八、九のほどやおはしけむ」の「そのころ」であり、それは即ち左近中将が「二十七、八のほど」の頃の話だと見る他は無い。つまり、今現在は源侍従薫君は 18 歳であり、左近中将 28 歳、右中弁 27 歳、姉君 19 歳、妹君 18 歳、従って玉鬘 51 歳、源殿 44 歳、藤大納言 49 歳、匂宮 19 歳ほどで、蔵人少将と藤侍従は未だ不明、といったところだ。

御前の花の木どもの中にも(前庭の花の木々の中でも)、匂ひまさりてをかしき桜を折らせて(色形の美しい桜の枝を折らせて)、「他のには似ずこそ(此れが一番ね)」など、もてあそびたまふを(などと言って姫君たちが花見を楽しんでいらっしゃるのを)、

「幼くおはしましし時(あなたがたがお小さくいらした時に)、この花は、わがぞ、わがぞと、争ひたまひしを(この花は自分の物と言い争っていらしたのを)、故殿は、姫君の御花ぞと定めたまふ(亡き父上は姉君の御花と判じなさるで、)。上は、若君の御木と定めたまひしを(母上は妹君の御木と判じなさったというのが)、*いとさは泣きののしらねど(私はもう大きかったので、さすがに悔し泣きはしなかったが)、やすからず思ひたまへられしはや(妹たちばかりが可愛がられていると、面白くなく存じられた事があったな)」とて(と左近中将は言って)、　*「いとさは泣きののしらねど〜」は注に＜『集成』は「父母が姫君たちにかまけて自分を顧みてくれない、と思った幼時の回想」と注す。＞とある。敬語や謙譲語から主語を拾うと、この部分の主語は発言者自身らしいので、左様に従って言い換えて置く。が、左近中将と姫君は9歳も違う。仮に姫が6歳の時のことだとしても、中将は15歳だった訳で、まして父大臣の存命中なら元服して貴公子然と出仕もしていただろうから、妹へのヤッカミというのは少し不自然に思える。ただ、故殿存命中の好日を懐かしむ、という大筋では納得出来る。

「この桜の老木になりにけるにつけても(この桜が老いた木になったことを見るにつけても)、過ぎにける齢を思ひたまへ出づれば(過ぎ去った歳月の長さが思われますので)、あまたの人に後れはべりにける(故父殿や故祖父六条院などの多くの人に先立たれ申した)、身の愁へも(この身の悲しみも)、止めがたうこそ(限がありません)」

など、泣きみ笑ひみ聞こえたまひて(などと泣き笑い申しなさって)、例よりはのどやかにおはす(この日はいつになくのんびりしていらっしゃいます)。*人の婿になりて(他家の婿に入って)、心静かにも今は見えたまはぬを(落ち着いていられない立場のように今は見受けられなさるが)、花に心とどめてものしたまふ(今日は姫君たちを気に掛けていらっしゃるのです)。　*「人の婿になりて」は注に＜他家の婿に入って。＞とある。中将を婿に擁せる家となると、今の左大臣家あたりになるかと思うが、当時の読者じゃない私にははっきりと明示してもらわないと、とても補語までは出来ない。明示して損は無いように思うが、何故こんな曖昧表現をするのか不思議だし、不服だ。

[第六段　玉鬘の大君、冷泉院に参院の話]

尚侍の君(玉鬘殿は)、かくおとなしき人の親になりたまふ*御年のほど思ふよりは(このように成人した人の親にお成りの御歳の割には)、いと若うきよげに(とても若く美しく)、なほ盛りの御容貌と見えたまへり(今なお充実した御表情に見えなさいました)。　*「御年のほど思ふよりは」について、注には＜玉鬘は、二十七八歳の左中将らの母親、四十八歳。＞とある。が、玉鬘の初産は24歳の十一月で男子を儲けたと真木柱巻五章二段にあり、自らの第一子である左近中将とは23歳の年齢差である事は明示されている。その左近中将が28歳であれば、母玉鬘は51歳になっている筈で、此処の注釈で「48歳」と言い切る根拠は何処にあるのか。この後で、その年齢が明示されるなら当然に従うが、それまでは今までの本文にある左近中将が「二十七、八のほどにものしたまへば」(当巻二章五段)という記事と、真木柱巻五章二段の「その年の霜月に、いとをかしき稚児をさへ抱き出でたまへれば」という記事に従って読むのが、健全な読者姿勢かと思われる。

*冷泉院の帝は、多くは(冷泉院は主に)、この御ありさまのなほゆかしう(この玉鬘のことが今も心残りで)、*昔恋しう思し出でられければ(宮仕え当時の昔が恋しく思い出されなさるので)、何につけてかはと(何かに託けては玉鬘と誼を結びたいと)、思しめぐらして(思い巡らしなさって)、*姫君の御ことを(姫君の参院を)、あながちに聞こえたまふにぞありける(しつこく申し入

れなさったということのようです)。　*「冷泉院」は玉鬘の4歳下なので47歳の筈。因みに弘徽殿女御48歳、秋好中宮56歳、今上帝39歳、入道宮39歳、春宮25歳、の筈。　*「昔」とは玉鬘が実際に尚侍として宮仕えしていた時のことで、出仕自体は玉鬘23歳の十一月から(真木柱巻一章三段)、朱雀帝が28歳で退位する時(若菜下巻二章一段)とは即ち玉鬘32歳まで解任がなかったとすれば、足掛け9年、丸8年ほどは就任していたことになるが、御所住まいは何と24歳の正月の、それも数日間だけ(真木柱巻四章一段)という、恐らく異例中の異例処置で、入内前は六条院で、退所後は故右家大臣邸で尚侍の執務を果たしていた、ということになりそうだ。入内だけに絞れば27年前の数日間だけで、なるほど其は印象的だったに違いない。　*「姫君の御こと」は六条院光君の晩年の朱雀院女三の宮との結婚が重なる。もう25年前のことで光君40歳、女三の宮14歳という歳の差婚だった、そして今、冷泉院47歳、玉鬘長女19歳、という取り合わせだ。更に晩婚の、更に歳の差婚だ。妙なところを引き継いだか。冷泉院は王位継承の重責を課せられたので、光君の奔放な女遊びは継ぐべくも無かった。その奔放さは薫君に引き継がれているようでもある。が、表向きの続柄は冷泉院は光君の弟宮で、薫君は光君の末子だが、血筋では冷泉院は光君の実子長男なので王家筋から見れば不義の子で、薫君は他人の不義の子だ。血筋も奔放さも継いでいるのは光君の孫の匂宮らしいが、家筋から見れば王家は源氏家とは別物だ。何とも複雑怪奇な様相を呈している相関。

院へ参りたまはむことは(姫君の参院については)、この君たちぞ(この兄君たちが)、

「なほ、ものの栄なき心地こそすべけれ(やはり退位された帝では張り合いがありません)。よろづのこと、時につけたるをこそ、世人も許すめれ(何でも時流に乗ってこそ世間は畏敬を示すものです)。げに、いと見たてまつらまほしき御ありさまは(確かに冷泉院の実に御婿として拝し申し上げたい御姿の素晴らしさは)、この世にたぐひなくおはしますめれど(この世に又と無くいらっしゃいますが)、盛りならぬ心地ぞするや(勢いに欠ける気がします)。琴笛の調べ(音曲にしても)、花鳥の色をも音をも(花の色や鳥の声にしても)、時に従ひてこそ(季節の風情を表わしてこそ)、人の耳もとまるものなれ(人の気持を豊かにします)。春宮は、いかが(皇太子は如何なんですか)」

など申したまへば(などと申しなさると)、

「いさや(いえ春宮では)、はじめより*やむごとなき人の(はじめから義兄女の高位妃が)、かたはらもなきやうにてのみ(並ぶ者無きような御威勢で)、ものしたまふめればこそ(仕えていらっしゃるので、)。　*「やむごとなき人」は注に<夕霧の大君が入内していることをいう。>とある。匂兵部卿巻一章二段に「大殿の御女はいとあまたものしたまふ。大姫君は春宮に参りたまひて、またきしろふ人なきさまにてさぶらひたまふ。」とあった。春宮は25歳の筈だが、この春宮妃の年齢は未だ不明、かと思う。

なかなかにて交じらはむは(それを圧して宮仕え申し上げようというのは)、胸いたく人笑へなることもやあらむと(辛く情けない目に遭うこともあるかと)、つつましければ(遠慮されますので)。殿おはせましかば(殿が御存命でいらしたなら)、行く末の御宿世宿世は知らず(将来の御運勢はいざ知らず)、ただ今は(入内自体は)、かひあるさまにもてなしたまひてましを(立派に輿入れさせ申し上げられたものを)」

などのたまひ出でて(などと玉鬘殿が仰ったので)、皆ものあはれなり(皆消沈します)。

［第七段　蔵人少将、姫君たちを垣間見る］

中将など立ちたまひてのち（中将たちが立って座を離れなさってから）、君たちは（姫君たちは）、打ちさしたまへる碁打ちたまふ（打ち差していらした碁を打ちなさいます）。昔より争ひたまふ桜を*賭物にて（昔から競ってきた桜の花が誰の物かを勝利賞品に賭けて）、　*「賭物」は「のりもの」ではなく「かけもの」と読みがある。何れ勝負に先立って決めた勝者の賞品らしいが、語用の違いは分からない。「のりゆみ」は公式行事なので、公儀と私儀とでわけるのだろうか。でも、そんな説明は辞書に無い。

「三番に（三番勝負で）、数一つ勝ちたまはむ方には（勝った方に）、*なほ花を寄せてむ（今度もまた花を譲りましょう）」と、戯れ交はし聞こえたまふ（と冗談を言い合いなさいます）。　*「また」は過去にも同様に桜をかけて碁を打ったらしいので＜今度もまた＞という言い方。「寄す」は此処では賞品に対して作用する語なので、他動詞の＜贈る＞という意味だろうが、木は半ば不動産なので所有権や管理権を＜譲る、渡す＞みたいな言い方になるのだろう。今季に於いて、花見をする度に敗者は勝者に＜あなたの桜を拝見させて頂く＞と言って、和やかに競い合った春の日を思い出にして享楽気分を満喫しながら過ごせる、というワケだ。こういう生活上の工夫は偉大な発明とさえ言えるのかも知れない。ゲーム自体を複雑にするのではなく、気の利いた賭物を設定することで日々の暮らしを彩る、というのは、社会性全体から見て非常に複雑な要素から構成される催事になるのだろう。

暗うなれば（暗くなって来たので）、端近うて打ち果てたまふ（軒先近くに出て勝負の一盤を打ち合いなさいます）。御簾巻き上げて（縁側の御簾を巻き上げて部屋を明るくして）、人びと皆挑み念じきこゆ（双方の女房たちが皆応援に熱中申します）。

折しも例の少将（折りしもいつものように蔵人少将が）、侍従の君の御曹司に来たりけるを（藤侍従の御部屋に訪れたが）、うち連れて出でたまひにければ（中将が侍従君を外へ連れ出しなさっていたので）、おほかた人少ななるに（全体に女房郎党が少ない上に）、廊の戸の開きたるに（部屋から母屋に向かう廊下の先の妻戸が開いていたので）、やをら寄りてのぞきけり（源少将はそっと母屋に近付いて姫君たちの様子を覗き見しました）。

かう、うれしき折を見つけたるは（こんな嬉しい機会に遇ったのは）、仏などの現れたまへらむに参りあひたらむ心地するも（有難い仏様が現れなさったところに丁度お参りしたような気がするのも）、はかなき心になむ（恋心のなせる業なのです）。

夕暮の霞の紛れは（夕暮れの霞に隠れて）、さやかならねど（はっきり見えないが）、つくづくと見れば（目を凝らせば）、桜色のあやめも（姉君の細長の桜の綾織模様も）、それと見分きつ（それと見分けが付きました）。

げに（なるほど紀の有朋が詠んだように）、*散りなむ後の形見にも見まほしく（桜色の衣装は花が散った後の余韻を楽しめるように）、匂ひ多く見えたまふを（風情豊かでいらっしゃるが）、いとど異ざまになりたまひなむこと（まるで其が姫君が他の男と結婚なさってしまった姿を示すようで、ますます身に詰まされて）、わびしく思ひまさらる（いっそう寂しくなります）。　*「散りなむ後の形見」は注に＜『奥入』は「さくら色に衣は深く染めて着む花の散りなむ後の形見に（古今集春上、六六、紀有朋）を指摘。＞とある。

若き人びとのうちとけたる姿ども(若い女房たちが寛いでいる姿も)、夕映えをかしう見ゆ(夕映えに美しい)。*右勝たせたまひぬ(右方の妹姫がお勝ちになりました)。「*高麗の乱声、おそしや(勝利曲の演奏が遅いですよ)」など(などと右方女房は)、はやりかに言ふもあり(調子に乗って冗談を言う者もいます)。　*「みぎ」は妹姫なのだろう。左右は左が高位だから、左が姉姫で、右が妹姫、かと思う。注には＜中君が勝つ。「せたまふ」最高敬語。玉鬘邸の古女房の語りという性格上、敬語の使用基準も従来と異なる。＞とある。　*「こまのらんじゃう」は注に＜右方の女房の詞。右方が勝ったので、「高麗楽の乱声」を催促。高麗楽は右楽、唐楽は左楽。＞とある。

「右に心を寄せたてまつりて(右が好きだと申して)、西の御前に寄りてはべる木を(西側の御庭先寄りに生えている木を)、左になして(左の物だと)、年ごろの御争ひの(長年の御争いは)、かかれば(言い掛かりを付けられて)、ありつるぞかし(来た訳なんですよねえ)」と、右方は心地よげにはげましきこゆ(と勝った右方は上機嫌で勢い付いて申します)。

何ごとと知らねど(源少将は何のことか分からなかったが)、をかしと聞きて(この和やかな賑やかさを愉快に思って)、さしいらへもせまほしけれど(冗談の一つも言ってからかいの差し出口も挟みたかったが)、「うちとけたまへる折(折角女同士で寛いでいる所に邪魔しては)、心地なくやは(気が利かない)」と思ひて(と思って)、出でて去ぬ(その場を去って帰りました)。「また、かかる*紛れもや(また同じような面白い場面に出くわすかもしれない)」と、蔭に添ひてぞ(と物陰に隠れながら)、うかがひありきける(姫君たちの様子を窺って玉鬘邸をうろつくのでした)。
*「まぎれ」は＜入り交じって判然としない事物＞で＜それと予期しない偶然＞みたいな語感。

[第八段　姫君たち、桜花を惜しむ和歌を詠む]

君達は(姫君たちは)、*花の争ひをしつつ明かし暮らしたまふに(この日の勝負を話の肴にしながら花見をして暮らしていらっしゃいましたが)、風荒らかに吹きたる夕つ方(風が強く吹いた夕方に)、乱れ落つるがいと口惜しうあたらしければ(桜の花びらが舞い落とされてしまうのがとてもはかなく惜しかったので)、負け方の姫君(負けた方の姉姫が一句)、　*「花の争ひをしつつ」は、その後も碁打ちをしたのでは無く、いや碁打ちはしたのかも知れないが、女房たちを巻き込んだ賭物催事としての話題作りとしては、それと決めて勝負したから白熱したのであって、そんなことは二度目は無い。だから、この「花の争ひ」はその勝負によって、桜が妹姫のものと決まったことで、景色の貸し借りを真似事言葉にして遊びながら花見をする、という洒落語用なのだろう。

「桜ゆゑ風に心の騒ぐかな、思ひぐまなき花と見る見る」(和歌 44-07)

「風に散るかと気に掛かる、気紛れに咲く桜でも」(意訳 44-07)

*「桜ゆゑ」は＜桜だけに＞みたいな言い方だろうか。「さくら」が＜桜の花木＞だけの意味なら「風に心の騒ぐかな」は＜花が散ってしまうかと気になる＞という意味になりそうだが、それだけの句なのだろうか。他意は分からない。「おもひぐまなし」は「思ひ隈無し」で＜思い遣りが無い＞という意味らしい。が、「隈無し」は＜分からない所は無い。行き届いている。＞という意味らしく、となると、「思ひ」が＜その心算で居る＞くらいの言い方で＜分かっている気でいる→相手の気持を考えない→気が利かない＞みたいなことだろうか。「見る見る」は＜見て思う＞とか＜思うものの＞くらいの言い方らしい。負けを片思いに例えて詠んだ戯れ歌、だろうか。

御方の*宰相の君(姉君付き上級女房の宰相の君が)、　*「宰相の君」は二段で年賀に来た源侍従に挑発的な歌を投げ掛けた経験豊富そうな女房のようだが、何より相当に身分の高い参議の家柄の、恐らくは血筋縁者で、姫君や源侍従を幼少期から知る幼馴染か乳母か乳母子あたりなのだろう。

「咲くと見てかつは散りぬる花なれば、負くるを深き恨みともせず」(和歌 44-08)

「咲いても散ってしまう花、負けた恨みも消え失せる」(意訳 44-08)

*桜を愛でる気持を恋情に準えての情緒か。賭物勝負の未練を失恋に準える、というのは、如何にも有り勝ちな言葉遊びだが、それだけに詠み方は相当な見せ所なのだろう。

と聞こえ助くれば(と唱和して慰め申し上げると)、右の姫君(勝った妹姫の攻め歌は)、

「風に散ることは世の常、枝ながら移ろふ花をただにしも見じ」(和歌 44-09)

「風に散るのは無常でも、負けたことには変わらない」(意訳 44-09)

*「枝ながら」の現代語語用で見る最も分かり易いのは＜枝葉末節ながら＝枝葉の小さなことですが＞という意味だ。上句の「風に散ることは世の常」を受けた言い方としては、その意味での語用も含まれているかと思う。つまり、世の無常という大局からすれば些細なことですが、という言い方。そして、この言い方がこの歌詠みの軽さを示す味わいであり、その軽さで皮肉が嫌味にならないだろうと踏んだ上での発表、なのかと思う。それはそれとして、もう一方では、この「枝ながら」の「枝」が＜賭けに勝って妹のものになった桜の枝＞のことである事は、この場では自明だ。そして、名詞に付く「ながら」の語用は＜～というものとして、～のままで＞を意味するので、「枝ながら」は＜その枝を勝負に負けた標しとして＞という言い方になりそうだ。「ただなり」は＜普通のことだ＞だから、「ただにしも見じ」は＜とても平然とは見ていられまい＞。

この御方の*大輔の君(妹姫付き女房の大輔の君の唱和)、　*「大輔の君」は「たいふのきみ」と読みがある。「たいふ」は＜五位の者の通称。＞と古語辞典にある。五位＝殿上人だから高級官僚＝上流貴族を意味しているのだろう。ただ、それ以上の高官であればその身分で示すだろうから、雲上世界では取り敢えずの有資格者、普通の肩が凝らない人みたいな語感、だろうか。

「心ありて池のみぎはに落つる花、あわとなりてもわが方に寄れ」(和歌 44-10)

「池に浮かんだ花びらも、風に吹かれて会いに来る」(意訳 44-10)

勝ち方の童女おりて(勝ち組の童女が庭先へ下りて)、花の下にありきて(桜の木の下を歩いて)、散りたるをいと多く拾ひて(散った花びらをとてもたくさん拾って)、持て参れり(姫の御前に持ってまいって、こう一句)。

「大空の風に散れども桜花、おのがものとぞかきつめて見る」(和歌 44-11)

「桜花 散った後まで おのがもの」(意訳 44-11)

左のなれき(負け組みの童女)、

「桜花匂ひあまたに散らさじと、おほふばかりの袖はありやは　(和歌 44-12)

「勿体無いと隠したら、誰も見映えに気付かない　(意訳 44-12)

*注に＜左方の童女なれきの反論歌。『河海抄』は「大空におほふばかりの袖もがな春咲く花を風にまかせじ」（後撰集春中、六四、読人しらず）を指摘。＞とある。引き歌は散る桜を惜しむ風情。散った花びらにまで我を張るのはただの貧乏根性、ということか。過ぎた真似をしておどけて見せるのも、それをたしなめるのも、全ては和やかな春の日の情景、ということらしい。いや、良いもんだ。こういう自然相手の楽しみは、気持さえあれば、どんな貧乏人にも出来る。だから花見は廃れない。金融政策で交易経済を刺激して、より高い組織生産性を求めるのも良いけれど、人類の存在以前に地球は在るのだから、与えられた天恵を楽しむ事を見失っては、何の豊かさか分からない、とは良く言われる立場認識だが、いつも見直してみるべき価値の有る知恵かも知れない。

心せばげにこそ見ゆめれ(ケチ臭い)」など言ひ落とす(などと悪口を言う)。